

草庵仏教

第207号
(発行日)

2007年9月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日
午後3時より。

○真宗共学会——毎月第一と
第三木曜日午後7時より。

*8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

この世の幸せ

この夏、お盆の忙しい期間が過ぎた後、私たち夫婦と二人の子供とその孫たち総勢八人で、レンタカーを借り、舞鶴市にある小さな海水浴場に遊びに行った。遊びに行ったらと連れていったという方が正確である。

良く晴れていて気温は高かったが、それ以前の猛暑というほどではなく、過ごしやすかった。日本海の海は私たちの住んでいる甲子園の浜とは違い、海水は汚れてなく、また海の色は何とも言えない美しい青色で、久しぶりに自然の美しさにふれた。

孫は上が5才、あと二人は3才で、かわいい盛りである。それぞれの父親に抱かれて、海に入り、実に楽しそうだった。孫たちにとっては海に入ることもなどは殆どないから、おそらく非常に新鮮な経験だと思ふ。

若い親たちも、自分の子供たちの満面楽しさがあふれている顔を見て、同じように満

足そうだった。私は砂浜に敷いた敷物の上で、彼らの楽しんでる様子を見ていた。

その時、ふっと「こういうのがこの世の無上の幸せというものなのだろう」と思ったものである。この世の幸福という点、豊かな財産を所有し、豪華な家に住んで、社会的にも名声を得、安定した地位を確保しているような状態を想像するけれども、幸せとはそういう多くの人の羨むような特別な状態でなくとも、平凡な日常の中にあるのである。「しあわせ」は遠い未来のいつかどこかに求めるのではなく、案外身近にあるものであろう。

ただ、子供や孫たちの楽しそうな光景を見ているなかにも、ある悲哀感とか不安感がある。今はこのように若い夫婦も仲良く、親子も仲良く、全員が健康で、経済的にも貧しいながら何とかやっていけるという状況は、決して永続的なものではないし、安定した

ものではない。子供が一人病気にでもなればたちまち悩みは起こる。また夫婦の関係や親子の関係がぎくしゃくすると、共に仲良く出かけることもなくなるだろう。孫が大きくなれば、進学だの、人間関係だの、就職だのという問題も出るだろう。いやこれを書いて、六十才も過ぎてくると、いつ故障が起こるかもわからない。実際、体力や足腰が弱っていくのは毎日のように実感する。

このような不安定な人生であり世の中である。まさに「三界は安きことなし、なおし火宅のごとし」の仏語の通りである。そういう意味からいうと、現在のこの世の幸せというものは「たまたま」であり、都合のいい因縁が重なっただけである。この世の幸せは「たまたまの幸せ」であつて、決して堅固なものではない。

そういうことをよく承知した上で、この世の幸せを有難い(あること難しい)ものであることを素直に喜ばせていたかどうかである。こうしたこの世の不安定な

人生であるが、阿弥陀仏はいつても、因縁のままに生きていく不安定な私の全存在を受けとめていてくださる。

この阿弥陀様に摂取されているという安定があつて、初めてこの世の不安定の中を生きていくことができ、へたまたまの幸せの有り難さも感じさせていたのだのである。

もし摂取による安定がなければ、この世のたまたまの幸せも、私などはその不安定や悲哀の影に悩まされざるを得ないであろうし、この世の幸せの有り難さも素直に喜べないと思う。そればかりか、この世の幸せをさらに外に探し求めるという過度の欲求に傾いていくのではなからうか。

(了)

《秋季彼岸法要》

9月22日(土)

午後2時始まり

*どなたでもご自由にご参詣ください。

真宗問答(二十八)

法蔵菩薩の修行2

『大経』に言わく、欲覚・瞋

覚・害覚を生ぜず、欲想・瞋想・害想を起さず。色・声・香・味の法に着せず。忍力成就して衆苦を計らず。少欲知足にして、染・恚・痴なし。三昧常寂にして、智慧無碍なり。虚偽諂曲の心あることなし。和顔愛語にして、意を先にして承問す。勇猛精進にして、志願倦きことなし。専ら清白の法を求めて、もつて群生を恵利しき。三宝を恭敬し師長に奉事しき。大莊嚴をもつて衆行を具足して、もろもろの衆生をして功德成就せしむ、とのたまえり。

(仏説無量寿経より)

D 「法蔵菩薩は、衆生の無明(迷い)煩惱を除いて、智慧と慈悲の円満せる仏に成らしめたいと願ひ、私たちの罪悪を引き受けて修行をされた、その修行の内容の一部がこの大無量寿経の経文に表されています。ここに大乘の菩薩の

姿がよく表されていると思ひます」

F 「大乘の菩薩とはどのようなお方なのでしようか」

D 「やさしくいうと、他の人々の幸せのため生きて自らの楽は求めず、他の人々の苦を自らが受けていく、そういうお方です」

F 「非常に気高い精神ですが、人々の幸せとは何ですか」

D 「基本的には大涅槃の樂のことで、悟りによる安らかな境界です。菩薩はそれを基軸として、さまざま衆生の苦を除き、安樂を与えようとするのです」

F 「自らの樂は求めず、他の苦を引き受けていくというのは非常に気高い生き方ですね」

D 「こうした菩薩の行いを代受苦と申します」

F 「代受苦とは」

D 「他に代わって自らが苦を受けることです。華嚴経には、菩薩は

未来のはてをつくしても、衆

生に力をささげ、ついには解脱を得しめようと思ひ、はてしなき生死のなかで、うまず、たゆまず、いかなる地獄の苦しみを受けても、衆生のために力をつくす。

あるいは

わたしは、無数の世界の、一々の衆生のために、地獄の苦しみをうけよう。また、諸仏が世にお出ましになり、衆生が、そのために樂しみをうけても、わたしは、地獄の苦しみをなめたのちに、はじめて無上のさとりを完成しよう。

あるいは

わたしは、一切の衆生にかわつて、一切の苦しみをうけよう。そして、一切の衆生をして、ことごとく涅槃に至らしめたのち、はじめてわたしは、無上のさとりを完成しよう。

と説かれています」

F 「このような菩薩の生き方こそ、真実とは何か、真実の生き方とはどういうものかを表しているのですね」

D 「この菩薩精神はまさに阿彌陀仏の前身である法蔵菩薩の精神ですね。そして代受苦の精神は、法蔵菩薩の志願として、無量寿経の嘆仏偈に表されています。その中に

吾誓う、仏を得んに、普くこの願を行ぜん。一切の恐懼に、ために大安を作さん。(乃至)

かくのごとく精進にして、威神量り難からん。我仏に作らん、国土をして第一ならしめん。(乃至)

たとい、身をもろもろの苦毒の中に止るとも、我が行、精進にして、忍びて終に悔いじ。と表白されています。法蔵菩薩が、自身が仏になるための修行を行うのは、一切のおそれおののいている衆生に大いなる真の安らぎを与えるためです。この願行を勤め励むことによつて仏になり、一切衆生を迎えいれる浄土を、この上なき尊い安らかな領域として開き、衆生を浄土に生まれしめるために、無間地獄の苦の中に留まろうとも、修行をやめずけつして後悔しない、と述べられています。この苦毒というのが阿鼻地獄のことで、阿鼻地獄の苦を受けても衆生を助けるための修行に励んで悔いることはない、と仰せられています。こうした法蔵菩薩の願いと修行によつて、南無阿彌陀仏ができたのです」

F 「南無阿彌陀仏は阿彌陀仏

の大悲のご苦勞によつてできたのですね」
D 「ええ、そういう南無阿彌陀仏だから、それをいただいて称える人は浄土に生まれ、仏になることができるのです」

【補説】

無量寿経に説かれている、いわゆる法蔵菩薩が修行をされるのは、自らがこの上ない悟りを完成し仏になれる、その目的は、仏の功德によつて一切衆生の苦を除き、樂を与えるためである。いわゆる利他のための修行である。

菩薩はなぜ修行をされるのか、それは他の衆生にまことの樂を与えんがためである。

しかもその樂とは、涅槃(さとりの)樂であり、涅槃のさとりを實現した衆生は今度は他の衆生を救うために利他の行をする。

法蔵菩薩が衆生を救うのは衆生を救うて菩薩にならしめんがためであり、菩薩にして他の衆生を救う活動にあらせたいためである。

私たちはつねに樂を求めている。しかしその樂は、ただ自分あるいは自分の家族だけ

の樂を求める場合がほとんどで、それは裏から言うと、私たちは自分が樂になるために他者に苦痛や苦勞をおしつけ、他者がそれによって苦を受けることには配慮しないのである。

最近の食品の安全にかんする事件でも、自分たちの会社が儲かるためには消費者の被害や苦痛を顧みない点が一番の問題である。

そして、弱肉強食の社会では、弱者が強者の利益確保のために不利益をこうむる。

社会一般だけのことではない。平生の自分の生き方や行動を反省すると、自分の樂のために、周りの人に苦を意識的無意識的におしつけている場合が多い。

「自らの樂を求めず、他の苦しみを引き受ける」という菩薩の生き方に照らされて、私たちの生活の姿が浮き彫りにされる。こうした教えがあるって、自分たちの姿があるべき姿ではないことが知らされる。菩薩の生き方が真実だから、真実に背いている我が身のあり方が照らし出される。

しかも法蔵菩薩は自らの樂

を求めて他に苦を押しつけて生きているような私たちを救うて、その罪を除き、悟りの智慧を完成させて、利他の菩薩にしようとしてされる。それが南無阿彌陀仏の働きである。単に私たちを救うて苦を除くだけではない。むしろ他の衆生を救う徳を完成させ、返って衆生の苦を引き受ける菩薩にしてくださいさる、それこそが如来法蔵の衆生救済の目的である。

親殺しの阿闍世は釈尊の大悲に救われたが、その阿闍世に、「世尊、我常に阿鼻地獄に在りて、無量劫の中にもろもろの衆生のために苦惱を受けしむとも、もつて苦とせず」という願心が起こる。

阿彌陀仏によって救われるとはどういうものなのかがここに出現している。もちろん、現在の私どもがお念仏を頂いたからといって、とても菩薩のような生き方ができるというのではない。生き様は昔と変わらないといっても過言ではなからう。ただ、凡夫の現在の生き方が、あるべからざる生き方をしているの

であり、おほずかしい生き方をしているのであり、あさましい生き方をしているのを知らされ、慚愧せしめられる。それと同時に、この一生を終えて浄土に生まれさせていただくなら、菩薩としての徳を身につけて菩薩の働きをさせていただけると喜びせていただく。それはまたこの世の人生においても、あるべき菩薩の生き方に徹々たるものであっても、身近な生活の中で習いたいものだと思われるのである。(了)

信仰夜話

「われを一心にたのまん衆生をば必ず救うべしと仰せられる御意は、後生の仕度は要らぬぞよ、そのまま唯の唯で連れてゆくぞよの、親の真実に嘘はないぞよとの替え言葉である。たのむと御浄土と引き替えにすることではない、嬉しいことぢや」

『信者めぐり』より

これは厚信の妙好人といわれた吉蔵同行の言葉である。『信者めぐり』の中に収録されている。ここで「われを一心にたのまん衆生をば必ず救うべしと仰せられる」という、このどこは

蓮如上人の御文であるが、ことに「瘦癯の御文」に

「阿彌陀如来のおおせられけるようは、
「末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」とおせられたり」

とある。また、御文には
「末代無智の、在家止住の男女たらんともがらは、こころをひとつにして、阿彌陀仏をふかくたのみまいらせて、さらに余のかたへこころをふらず、一心一向に、仏たすけたまえともうさん衆生をば」

「一心一向に阿彌陀仏をふかくたのみまいらせて、後生たすけたまえともうさんひとをば、みなみな御たすけあるべし」

など、阿彌陀をふたごころなくたのむ信心がくりかえしまきかえし説かれていた。ふたごころなく阿彌陀をたのむ衆生の信心は、「一心に阿彌陀をたのめ」との阿彌陀の仰せがまずあって、その心を頂いた信心である。

ところが、阿彌陀仏が「つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をかならず救う」という仰せ(第十八願)を聞くと、「一心に阿彌陀をたのめば助けてくださる、たのまなければ助からぬ」と受け取り、何とかして「阿彌陀をたのめよう」「阿彌陀にお任せしよう」「阿彌陀にゆだねよう」と計らうことになってしまう。

そこにあるのは、吉蔵同行のいわれ

るように「たのむとお浄土を引き替えるにする」ように、知らず知らずなっているのである。

「信じたら助けてくださる」「たのんだら救われる」「称えたら助けてくださる」「自覚したら助かる」などなど、私の側の「信じる」「称える」「まかせろ」「自覚する」ことと引き替えにお助けやら救いやらがあるように思ってしまうのである。

ところが吉蔵同行は、そうではないといい、「我を一心にたのめ」ということは「後生の支度はいらぬぞ」ということ、「そのまま唯の唯でつれてゆくぞよ」という丸々のお助けの御慈悲を伝える言葉であって、「後生の支度はいらぬ」という親の真実に嘘はないぞ」という思召しの言い換えたものであるといわれるのである。

われら凡夫の方から、助かるための用意も準備もいらぬ、条件もつけぬ、
「そのままなりで引き受けるから、心配するな」という大慈悲のお言葉が「我を一心にたのまん衆生をかならず救う」との仰せである。

もう一ついえば、たのめぬ奴だから、我をたのめとの仰せである。信じられぬ奴だから、我に任せよの仰せである。任せられぬ奴だから、そのまま引き受けるとの仰せである。自覚できぬ奴だから、我が丸々受け持つの仰せである。この阿彌陀仏の仰せはまことに逃げぬ者をどこどこまでもおっかけて捨てぬという大慈大悲である。(了)

歎異抄講座

おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり。しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゆしき学生たちのおおく座せられてさうろくなれば、かのひとにもあいたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。

(歎異抄第二章より)

現代語訳(あなたがたがはるる十余りもの国境をこえて、命がけでわたしを訪ねてこられたのは、ただひとえに極樂浄土に往生する道を知りたいという一心からです。けれども、このわたしが念仏のほかに往生する道を知っていると、またその教えが説かれたものなどを知っているだろうかとかお考えになつてゐるのなら、それは大変な誤りです。そういうことであれば、奈良や比叡山にもすぐれた学僧たちがいくらでもおいでになりますから、その人たちにお会いになつて、浄土往生のかなめを詳しくお尋ねになるとよいのです)

歎異抄講座は一応終わったのですが、第二章のこの部分の解説が欠けていましたので、追加いたします。

京都におられた聖人のもとに、北関東からご門弟たちが何人かのグループで、生死の問題における惑いをはらしたいと、命がけで来られたのでした。聖人はこの頃は八十才を越えておられたといわれています。この人たちの中に歎異抄の著者唯円房もいたのでしょうか。というのは、歎異抄第二章の記述は当人でなければ書けないほどのリアルな臨場感があるからです。

北関東から来られたのですから、東海道を通ってきたとすると、それこそ十余か国で、常陸・下総・武蔵・相模・伊豆・駿河・遠江・三河・尾張・美濃・近江・山城と十二か国を経過することになります。日数は二十日前後、往復すると四、五十日はかかったでありましょう。街道筋を、時には強盗が横行することもあったし、食料に困ることもあったでしょう。長旅の疲れ、水あたり、流行病や風土病など、危険がいっぱいでした。

現に、聖人の弟子で、上京の途中で病にかかり、ようやく京都にたどり着いて、聖人のもとで往生の素懐をとげた高田(栃木県)の覚信房のような方もいました。また高田の顕智上人も、上京の途中で船が突風にあい、遭難しそうになったといわれています。

ですから「身命をかえりみず」というのは決して誇張された表現ではありません。

このような関東のご門弟たちが聖人を尋ねてくるという背景に、関東のご門弟やそのもとで聴聞している人たちの間に、念仏にたいする疑惑が生じ、道を見失っていた人々がたくさんでたからです。それは何故かという、念仏者への弾圧が在地の権力者からなされたことや

ことに善鸞のまどわしによって今まで聞いてきた真宗の教えにたいする信頼をうしなつていったのでした。

聖人のお子さんである善鸞は京都におられる老いた聖人の名代として、聖人が関東に派遣されて、教化にあたつていたのですが、(父親鸞から夜中に他の人には語られてない法門を自分だけ教えてもらった)といつて、布教したといわれ、関東の門弟たちは、聖人から長年聞いた教法と違うことを、善鸞が「父親鸞の教え」といつて語るものですから、大きな惑いを生じたのでした。

そういう信仰上の惑いを解決したいということが、意を決して京都までいのがけて聖人を尋ねられたのがこの人たちでした。

聖人はこうした人たちを前に、まずこの人たちの問いを「我が身の往生極樂の道を知りたい」とののだとはつきりとさせられました。

これは当然そうなのですが、私たちが真宗の聞法をする場合、ややもすると、仏法聴聞が単なる「人生にとつて役にたついい話を聞こう」とか、仏教の孝養を深めたいとか、真宗の教義を知りたいとか、あるいは住職や友達に誘われてという風な、要するに自己一身のぬきさしないうような問いを持つて聞いていないことが多いのです。

「人生生活の上でためになるお話を聞く」というような真宗の聴聞では、いまだ法を聞く態度になつていません。人間関係を良くするための方法とか、あるいは人生をより充実させるために聞くとか、あるいはこの社会を良くするために真宗を学ぶというのは、聴聞に入る縁と

してはそれでいいのですが、まだ自身「人生そのもの」が問題になつていないのです。「自分とは何か」「人生とは何か」「この自分はいつたいたいどうなるのか」「どこに本当のやすらぎがあるのか」というような根源的な問題になつていないのです。

ですから、どうしても真宗の聴聞が、私の死活の問題を聞くという態度にならないので、お念仏の話聞いても、なかなか響いてこないのです。

古来、往生極樂の道とか生死出離の道を求めるというのは、これをいただかなくて生きることも死ぬこともできない、そういう「一大事」であります。

そういう問題を抱えて関東から来られたことを、聖人はここで「往生極樂の道を知りたいにこられたのだ」と問題を明確化され、聞く人の姿勢を今一度ただしておられるのではないのでしょうか。(了)

《焼香について》

お焼香は法要の時にありますが、報恩講や彼岸会の外に、葬儀式や年回法要(ご法事)の時などに行います。祥月命日の法要に行くこともあります。月命日の法要や毎日の勤行の時には普通は焼香はいたしません。

ご法事で焼香をする場合は、住職が読経する前に、炭に火をつけて香炉に入れ、焼香できるように準備をしておくようにします。